

発表⑦



「日・モ国語教科書における 4技能のバランス」

澤 知子
青年海外協力隊 ウランバートル国立大学

D.ERDENESUVD 第18番学校

OECD が進めている PISA (Programme for International Student Assessment) と呼ばれる国際的な学習到達度 (科学・数学・読解力) に関する調査結果をふまえて、日本では 2006 年に文部科学省が読解力向上プログラムを開始した。このプログラムの目的は、「生きる力」「確かな学力」を育成することとされ、現行学習指導要領にも反映されている。

新しい学習指導要領の授業時間数をみると、国語はどの学年を見ても一番時間数が多く、小学 1・2 年生の国語は週に1時間増加し、さらに 5 年生から外国語として英語の授業が加わった。国語教育の内容は、3 領域 1 事項:A「話すこと・聞くこと」B「書くこと」C「読むこと」D「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」。教科書の指導事項の内容は緻密に記されており、2 学年ごとに段階的に学習到達点が複雑になっていき、1 年生から 6 年生まで体系的に学習内容が構築されている。さらに、指導事項・言語活動例を見ると、読むの項目にも他技能が含まれており、ただ読むだけではなく、書くや話すのような他技能へつながるように 4 技能をバランスよく育成する工夫がされている。4 技能の時間配分についても詳細に記載されており、以下にそれを表にした。

これに対して、モンゴルの新教育スタンダード (2013) における国語教科書は日本と同様、3 領域 1 事項に分けられている。2013 年を境として新旧の教科書分析をしたが、モンゴルには 4 技能の時間配分を示した参考資料がないため、教科書の設問内容から割り出した。以下の表から新旧で変化した点は、書くの割合が半分以下になり、話すは 3 倍になったことだ。新スタンダードでは「子ども中心の教育」を核とし、国語教育では言語運用能力について言及しており、以前にはなかった話し合いや発表の課題が増えたのがこの変化に現れた。しかしながら、現場の教師には新スタンダードの考え方が定着しておらず、新しい教科書の使い方を把握していないため、以前のようにひたすら書く、暗唱することが重要視され続けているのがモンゴルの国語教育の問題点であろう。

今回のプロジェクトを通して、読解力を向上させるには 4 技能の総合的な力が必要であり、4 技能を別々に考えるのではなく、包括的とらえることが重要であると分かった。

表: 技能別の国語教育教科書における割合

	日本 (光村図書出版)	モンゴル (旧) 2013 以前	モンゴル (新) 2013 年以後
読む	39%	32%	30%
書く	38%	57%	28%
話す	13%	11%	32%
聞く		0%	5%
その他 (国・伝)	10%	0%	5%